Q7 他の児童と違う行動をする場合

〈このような状態は自閉症の特性からきています。〉

A君は、登校すると学校中の換気扇を点検しに走りまわります。A君は、換気扇などの回るものや動くものが大好きで、毎朝確認をすることから学校生活を開始しています。そのため、いつのまにか学校中の換気扇の場所をすべて知っているのです。

このように、自閉症の子どもの中には、一つまたはいくつかの興味があることに熱中したり、こだわったりして同じ行動を繰り返す特徴があります。もともと、対人関係を作ることや集団を意識して活動することが苦手ですから、自分の興味やこだわりが優先されがちなのです。

〈このような場合の支援　1〉

小学校２年生の知的障害をともなう自閉症の男児。水へのこだわりが強く、気がつくと校門近くの池の所へ行って水に触れ、感触を楽しんでいる様子です。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

① 池の所に行ってもよい時間を決める。「授業中はだめだけれど、休み時間ならよい」ということを理解するまでは、何回か連れ戻し、その場での指導や対応が必要になるかもしれない。
② 遊びを楽しむという発達段階にあることも考えられる。水以外にはどんなものに興味を持つのか探ってみる。
③ 許容できる行動に置き換えていくために、池で遊ぶ以外のいくつかの選択肢を用意する。
④ 支援する際には、周囲の子どもにも理解してもらうために、「先生と○○君は今こんなことをがんばろうとしているよ」と伝えておく。

〈このような場合の支援　2〉

小学校４年生の高機能自閉症の男児。彼はある映画に夢中になっています。授業中、休み時間、食事中とその話を始めると止まらなくなり、周囲とは関係なく一人でおもしろがる傾向があります。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

⑤ 「よく知っているね」などあいづちをうちながら、子どもの世界に入ってみるような対応も時には必要。かみ合った会話が育つこともある。
⑥ 周囲の状況に気付くような言葉をかけ、話を切り上げさせる時も必要。
⑦ 「○○研究」といったノートを作らせて、本人の興味等をまとめる方法も考えられる。その際、その子どもだけ特別に行うのではなく、学級の全児童にも各自作らせるのがよい。
⑧ 「お話のルール」を確認して、どのような状況や場面では話を止めるのか、教師と一緒に個別に確認しておく。
⑨ 「ふざけている」とか「わざとやっている」といった誤解をされることも考えられるので、道徳や学級活動の時間等を利用して全体に指導する。

学級担任の記録（メモ）

＜項目の利用回数＞

月／日	対象児の問題	教師やクラスの子どもの対応	対応後の対象児の様子